

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K20880

研究課題名(和文)ロシア帝国内のチベット仏教徒と南・東南アジアの民族知識人に関する研究

研究課題名(英文) Historical study on the relationship between Tibetan Buddhist followers in the Russian Empire and indigenous Buddhist followers in South and Southeast Asia

研究代表者

井上 岳彦 (Inoue, Takehiko)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・共同研究員

研究者番号：60723202

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ロシア帝国の仏教外交がチベット仏教の枠を超えて南アジア・東南アジアの仏教圏にまで展開し、そこにロシア帝国内のチベット仏教徒が深く関与し、現地の民族知識人とのあいだに相互作用が生じる過程を、歴史学的に解明するものである。

とくに、19世紀末から20世紀初めにおけるロシア東洋学者とロシア国内の仏教徒の動向について、ロシアの未公開史料の収集・分析によって読み解き、南アジア・東南アジアの仏教徒社会への関与のありようを検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、19世紀末から20世紀初めにロシア帝国内の仏教徒の果たした役割を、アジア仏教社会の中に位置づけるところにある。ロシア帝国内の仏教徒が媒介者となり、「仏教の保護者」としてのロシア皇帝像を利用しながら、ロシア帝国は南アジア・東南アジアの仏教信仰地域といかなる関係性を構築したのか。ロシア政府、ロシア国内のチベット仏教徒、南アジア・東南アジアの仏教徒知識人の三者関係を明らかにし、アジアとロシアの歴史的関係に新たな視点を提示する。

研究成果の概要(英文)：This study clarified how the Russian Empire addressed Buddhist society in South and Southeast Asia beyond the framework of "Tibetan Buddhist World," and how Tibetan Buddhists (the Buriats and the Kalmyks) were involved and interacted with indigenous Buddhists in these communities.

In particular, this study examined the involvement of Russian orientologists from the end of 19th century to the beginning of the 20th century by collecting and analyzing unpublished Russian historical documents, and examined the characteristics of Russian involvement in the Buddhist societies of South and Southeast Asia.

研究分野：地域研究

キーワード：カルムイク人 ロシア帝国 チベット仏教 東洋学者 ナショナリズム アジア プリヤート人 交流史

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

ロシア仏教界では、近年、プーチン大統領を「菩薩の化身」と表象し神聖化することで、現体制を擁護する傾向が見られるようになった。その際に使用される言説は、帝政期におけるロシア皇帝と仏教団との関係に起源を持つ。そのため、ロシア連邦と仏教社会の現在を理解するには、17世紀以来のロシア皇帝と仏教徒との関係史を解明することが必要である。

近年のロシア帝国史研究では、その多宗教性、すなわち、ロシア帝国がロシア正教を国教として奉じていただけでなく、その他の多くの宗教と関係を構築していたことに注目する研究が盛んである。日本でも、ロシア帝国内の諸宗教と外部世界の関係について精力的に研究が行われてきた〔志田恭子 2009、鶴見太郎 2012、長縄宣博 2012 など〕しかしながら、ロシア帝国の仏教徒に関しては、世界的に研究蓄積が少なかった。そこで申請者は、ロシア帝国と国内のチベット仏教徒がどのような関係を構築したのかを解明するため、ヨーロッパ・ロシア南東部に住むカルムイク人に注目し博士論文を執筆した。カルムイク人への注目は、少ない研究蓄積の中でもシベリアのブリヤート人に比べ、さらに未解明な部分が多いからである。この論文は、地理的・地政学的な配慮にもとづくロシア帝国内のチベット仏教徒に対する統治政策と、僧侶が表象する「菩薩の化身」としてのロシア皇帝像の多様性を明らかにし、ロシア帝国における仏教政策の全体像を描いた。

本研究課題の着想に至ったのは、ロシア帝国内のチベット仏教徒(カルムイク人やブリヤート人)と南アジア・東南アジア地域(シャム王国、英領セイロン、英領ビルマなど)の仏教徒のあいだに、従来注目されてこなかった関係があった可能性を公刊史料の分析から見出したからである。例えば、「スリランカ建国の父」と呼ばれるアナガーリカ・ダルマパーラは、1901年にロシア政府に宛てた書簡のなかで、仏教を「保護」するツァーリにブッダガヤ遺跡の整備とロシアからの巡礼者用宿泊所建設の費用を要請している〔公刊史料集『ロシア・インド関係、1900-1917年』(ロシア語、1999年)〕また、シャム王国は、王子の一人をロシアに留学させるとともに、サンクトペテルブルグに建設された仏教寺院に本尊を、カルムイク人には仏舎利をそれぞれ寄贈した〔公刊史料集『ロシア・シャム関係、1863-1917年』(ロシア語、1997年)〕これに対して、カルムイク人やブリヤート人の高僧たちは、チベット巡礼の途中でシャム王国や英領セイロンなどを訪問した。したがって、ロシア帝国内の仏教徒が媒介者となり、「仏教の保護者」像を一種のレトリックとして使ってロシア帝国と南アジア・東南アジア仏教信仰地域を結びつけていたという可能性を検討する必要がある。その際、ロシア帝国の対アジア外交における仏教徒の単なる活用ということだけでなく、ロシア政府、ロシア国内のチベット仏教徒、南アジア・東南アジアの仏教徒知識人の三者がどのような人的ネットワークを築き、いかなる意図をもちながら相互に影響し合っていたのかという点を包括的に検証することが必要である。

2. 研究の目的

本研究は、ロシア帝国の仏教外交がチベット仏教の枠を越えて南アジア・東南アジアの仏教圏にまで展開し、そこにロシア帝国内のチベット仏教僧侶が深く関与し、現地の民族知識人とのあいだに相互作用が生じる過程を歴史学的に解明することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究課題の申請にあたっては、以下の2点を探究することを課題として設定した。(1)ロシア国内のチベット仏教僧侶による南アジア・東南アジア訪問が開始される経緯と、その際のロシア政府の関与について明らかにすること。(2)ロシア国内のチベット仏教僧侶と南アジア・東南アジアの民族知識人のあいだに、いかなる関係性が醸成されたのかを明らかにすること。これらの2つの課題について、本研究は、未公刊史料の調査を通じて、ロシア帝国が対アジア外交において国内のチベット仏教徒を利用したということだけに留まらず、ロシア政府、ロシア国内のチベット仏教徒、南アジア・東南アジアの仏教系民族知識人の三者がどのような人的ネットワークを築き、いかなる意図をもちながら相互に影響し合っていたのかという点を歴史学的に解明する予定だった。

しかし、初年度の調査の結果、課題(1)を優先的に検討することが課題(2)の探究のためにも不可欠であることが改めて浮き彫りになり、ロシアの各公文書館に所蔵される未公刊史料の分析、特にロシアの東洋学者や軍人とロシア国内の仏教徒の動向を分析することから課題(1)に取り組むことにした。ロシア科学アカデミー公文書館サンクトペテルブルグ支所、ロシア科学アカデミー東洋写本研究所、ロシア地理学協会、ロシア国立歴史公文書館、ロシア国民図書館のアーカイブ史料を収集・分析した。また、平成30年度からは、イギリス国立公文書館、大英図書館、ロンドン大学東洋アフリカ研究所等での調査も開始した。しかし、平成31年度から、新型コロナウイルス感染症が世界的に大流行したため、未公刊史料にもとづく研究を断念せざるを得ず、国内所蔵の史資料を分析することで課題の探究を行なった。

4. 研究成果

主な研究成果として、以下の4点を挙げる事ができる。

(1) 仏教徒同士のつながりにおけるロシア東洋学者(インド学、チベット学、モンゴル学、中国学、日本学などを含む)の重要性が明らかになったこと：I.I.ミナエフやF.I.シチェルバツコイなどのロシア東洋学者は、ロシア帝国の威信を背景に集積される情報や資金を有する存在であり、異なる地域の仏教徒同士は東洋学者を巧みに利用しながら(東洋学者は仏教徒からの協力を利用しながら)交流を活発化させていたことが明らかとなった。

(2) 仏教徒同士のつながりにおけるブリヤート人が果たした重要性を再確認したこと：(1)で示したロシア東洋学者と様々な地域の仏教徒を仲介する存在として、ロシア語、モンゴル語、チベット語に通じるブリヤート人の重要性が再確認され、それはロシア国内のカルムイク人と東洋学者の交流においても同様であることが判明した。カルムイク社会に関与したブリヤート人の存在は、カルムイク中心主義的な現地の「カルムイク民族史」の中では等閑にされてきており、今後の重要な視点となる。

(3) 新史料の発見：

ロシア科学アカデミー公文書館サンクトペテルブルグ支所における調査の結果、カルムイク王公ツェレンダヴィド・トゥンドウトフがダライラマ13世とニコライ2世に充てた書簡を発見した。これは、現地でも全く存在の知られてこなかった書簡であり、カルムイク・チベット・ロシア三者の複雑な関係性の解明において、貴重な手がかりとなりうる。

(4) 今後の展望として、大菩提会(Maha Bodhi Society)研究の必要性が浮上したこと：大菩提会がチベット仏教の枠を超えるアジア仏教のネットワークとして機能していた可能性を検討する必要性について国際チベット学会の参加者で認識を共有し、ロシアとこの協会の関係を解明することが新たな課題となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 Takehiko Inoue	4. 巻 41
2. 論文標題 Book Review. Dittmar Schorkowitz. „... Dass die Inorodcy niemand rettet und das Heil bei Ihnen selbst liegt ...“ : Quellen und Beiträge zur historischen Ethnologie von Burjaten und Kalmucken (Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2018), xviii+743 pp.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Acta Slavica Iaponica	6. 最初と最後の頁 125-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 井上岳彦	4. 巻 20(1)
2. 論文標題 遊牧から漁撈牧畜へ 定住化政策下のカルムイクについて (18世紀後半～19世紀中葉)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地域研究	6. 最初と最後の頁 37-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 井上岳彦	4. 巻 57
2. 論文標題 1850年代ロシア帝国における跛行的宗教行政 カルムイク人仏教徒・保護監督長・国有財産省	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史研究	6. 最初と最後の頁 43-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 井上岳彦	4. 巻 100
2. 論文標題 遊牧指導者の変容する権力：17世紀初め～20世紀初めにおけるカルムイク草原社会	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ロシア史研究	6. 最初と最後の頁 145-165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Takehiko Inoue	4. 巻 39
2. 論文標題 Book Review. (XVIII - . XX .), , 2013. xiii+338 C	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Acta Slavica Iaponica	6. 最初と最後の頁 127-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石濱裕美子・井上岳彦	4. 巻 33
2. 論文標題 ロシア科学アカデミー公文書館所蔵チベット文三書簡の歴史的意義	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 内陸アジア史研究	6. 最初と最後の頁 99-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井上岳彦	4. 巻 63
2. 論文標題 ダムボ・ウリヤノフ『ブッダの予言』とロシア仏教皇帝像	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 スラヴ研究	6. 最初と最後の頁 45 - 77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 11件)

1. 発表者名
2. 発表標題 “ (1905 .), ”
3. 学会等名 XXI - II (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井上岳彦
2. 発表標題 「2つの教団、2つの身分：帝政期カルムイク社会の統治構造」
3. 学会等名 近代中央ユーラシア比較法制度史研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井上岳彦
2. 発表標題 農耕が先か、定住化先か：ロシア帝国支配下にあるカルムイク人の対応について
3. 学会等名 第7回「牧畜社会におけるエスニシティとエコロジーの相関」研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井上岳彦
2. 発表標題 D. ショルコヴィツ新著『誰も異族人を救わない、その幸せは彼ら自身にある：プリヤート人及びカルムイク人に関する歴史民族誌論文史料集』（2018）を読む
3. 学会等名 日本シベリア学会第5回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takehiko Inoue
2. 発表標題 Buddhists surrounded by Muslims in the Russian empire: How the Kalmyks in the Volga steppe restored the Khanate after the 1771 exodus?
3. 学会等名 The 16th Biennial Conference of the European Society for Central Asian Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takehiko Inoue
2. 発表標題 The Kalmyk Buddhist Monks in the Russian Empire in the Late Nineteenth and Early Twentieth Centuries
3. 学会等名 The 14th Seminar of the International Association for Tibetan Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井上岳彦
2. 発表標題 旅行先としての清帝国：カルムイク人・プリヤート人の『旅行記』から
3. 学会等名 国際シンポジウム『清帝国におけるモビリティ再興：モンゴルの場合』（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takehiko Inoue
2. 発表標題 " The Transformed Society of the Kalmyk Emigres in Europe in 1920s-40s "
3. 学会等名 Ninth East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takehiko Inoue
2. 発表標題 " The Kalmyk Leader Attempted to Change the Empire: Ts.-D. Tundutov ' s Strategy in the Late Nineteenth and Early Twentieth Century "
3. 学会等名 International Workshop "A New Frontier in the Study of Modern History of Central Asia : Research Collaboration between Kazakhstan and Japan" (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takehiko Inoue
2. 発表標題 “Refugees Recruited: the Kalmyk Ethnic Movements in Nazi Germany”
3. 学会等名 International Workshop "Transboundary Comparative Study on Mobility, Fluidity and Infrastructure" (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takehiko Inoue
2. 発表標題 Desiring for the Sacred Places: Research on the Buddhist Practice in Kalmykia
3. 学会等名 International Conference "Mongolian Buddhism in Practice" (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 井上岳彦
2. 発表標題 聖地創造の夢：誰が寺院や仏塔を建てているのか
3. 学会等名 「ユーラシア地域大国における聖地の比較研究」研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Takehiko Inoue
2. 発表標題 Kalmyk Impacts on Tibetan Buddhist World in the Late 19th- Early 20th Century”
3. 学会等名 The 11th International Congress of Mongolists (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名
4. 発表年 2016年

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 井上岳彦
2. 発表標題 弱者の言語選択：帝政期カルムイク人仏教徒の出版事業
3. 学会等名 「ロシア帝国の出版メディアとネットワーク」研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 Yukiko Tatsumi, Taro Tsurumi, Yusuke Toriyama, Abram I. Reitblat, Hajime Kaizawa, Takehiko Inoue, Danielle Ross, Akira Sakurama, Melissa Stockdale	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Bloomsbury Academic	5. 総ページ数 264 pages (うちTakehiko Inoue分担執筆pp. 123-140)
3. 書名 Publishing in Tsarist Russia: A History of Print Media from Enlightenment to Revolution	

1. 著者名 Yumiko Ishihama, Makoto Tachibana, Ryosuke Kobayashi, Takehikio Inoue, eds.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Union Press	5. 総ページ数 256
3. 書名 The Resurgence of "Buddhist Government": Tibetan-Mongolian Relations in the Modern World	

1. 著者名 杉本良男、松尾瑞穂、望月哲男、小林宏至、井田克征、高橋沙奈美、韓敏、前島訓子、井上岳彦、河合洋尚、櫻間瑛、川口幸大	4. 発行年 2019年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 352
3. 書名 『聖地のポリティクス：ユーラシア地域大国の比較から』	

1. 著者名 Ishihama Yumiko, Wada Daichi, Tachibana Makoto, Sergius L. Kuzmin, Inoue Takehiko, Baatr U. Kitinov, Nikolay Tsyrempilov, Hamugetu	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Amsterdam University Press	5. 総ページ数 264
3. 書名 The Early 20th Century Resurgence of the Tibetan Buddhist World: Studies in Central Asian Buddhism	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------